世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

日中共通漢文教材の分析とその可能性：高大接続へのワンステップ

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2017-06-27
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 林, 教子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/560

日中共通漢文教材の分析とその可能性

―高大接続へのワンステップ―

林　教子

Ⅰ　「漢文」に対する高等学校と大学の隔たりを埋めるために

(1)　高等学校国語科「漢文」と大学の「中国古典文学」

日本における「漢文」とは何かを端的に言えば、古典中国語の文語文のことである。あるいは古代中国語の書き言葉を用いた文章と言ってもよいだろう。つまり「漢文」は外国語で書かれた文章なのだが、高等学校までの「漢文」では、原文を訓読という方法を用いて訓点（句読点、返り点、送り仮名の総称）を施した「訓読文」を主として扱う。これは日本語の範疇であるため、「国語科」の古典分野で学習している。現行「高等学校学習指導要領　国語」（平成21年公示）にも、「古典の教材については、表記を工夫し、注釈、傍注、解説、現代語訳などを適切に用い、特に漢文については訓点を付け、必要に応じて書き下し文を用いるなど理解しやすいようにすること。」[1] と明示されている。つまり、高等学校までは原則として白文は扱わないことになっているのである。

一方、大学で教授される中国古典では、大半が訓点のない漢文の原資料（白文）を扱い、必要に応じて「漢文訓読」、あるいは外国語の文学という意識を強めた「中国語直読」、またはその両方を用いて白文を読み解いていく。

このような高等学校と大学の違いは、近年、大学側にも浸透しつつあり、「漢文学」や「訓読学」などと名付けられた講義を設定して両者の接続を図っている。筆者は、武蔵野大学（以下、「本学」とする）日本文学日本文化学科の1年次必修科目「漢文学」を担当するに当たり、主たる目標を高校までの「漢文」の内容を再確認しながら大学の中国古典へと繋げることに設定した。具体的には、漢文の構造を把握して白文を何とか読み解くための基礎を身に付けることだと考え「復文」[2] を実践しているが、これについては別の機会に検証したい。

(2)　学生の「漢文」に対する意識と経験値

２００７年に国立教育政策研究所が実施した「教育課程実施状況調査」では、「高校生の約７割が漢文嫌いである」という結果が報告されている。筆者も、今年度（２０１６年度）本学で「漢文学」を履修している学生を対象に、「漢文」に対する意識と学習状況を把握するため「漢字・漢文に関するアンケート」を実施した。その結果、国立教育政策研究所の調査と同様、漢文を嫌う傾向が認められ、大学での「漢文学」の授業にも不安感を抱く学生が多いことがわかった。

また、加速度的に進んでいる情報化社会の影響下において、漢字を手書きしたり、紙媒体の辞書で調べたりする機会の減少も含め、漢字文化そのものに接する機会が乏しくなっていた。（結果の詳しい分析は本論文「Ⅱ」で述べる）

以上のような現状を踏まえて、高等学校と大学の古典学習を繋げるためにはどのような指導が有効か論じてみたい。

(3) 日中共通の漢文教材の活用

本論文では、古典学習の高大接続の一つの手段として、中国の「語文」（日本の「国語」に相当する教科）の教科書とその教師用指導書を参考にした指導法を検証する。両国の国語教科書は、漢文分野において、李白・杜甫・白居易等の漢詩や『論語』『史記』など多数の共通教材を採録している。しかし、それらの学習内容や指導方法を、教科書だけでなく教師用指導用も対象とした研究はほとんど行われていない。

近年、日中両国では様々な教育改革が打ち出されているが、その基本方針にも多くの共通点を見出すことができる。次に２０００以降の主な教育改革を簡潔に示しておきたい。

《中国の「課程標準」[3]と日本の「学習指導要領」の基本方針比較》

中国「課程標準」	日本「学習指導要領」
２０００年～２０１０年 ・２００１年「全日制義務教育語文課程標準（実験稿）」制定 〈応試教育（知識詰込み型）〉から〈素質教育（自己の資質重視）〉への転換 ※附録：《古詩文背誦推薦篇》（120篇）	・２００８～２００９（平成20～21）年　改訂 〈「知識基盤社会」における生きる力〉の育成　〈伝統的言語文化と国語に関する事項〉の設置 ※小学校から漢文必修
２０１１年～ ・「義務教育語文課程標準（２０１１年版）」制定 〈探求式・対話式学習〉の一層の推進 〈実践重視〉〈多読多写〉 ※附録：《古詩文背誦推薦篇》（135篇）	・２０１６（平成28）年８月「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」（「中教審・報告」）〈主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニングの視点）〉 ※学習内容は削減しない

この表から、両国の教育基本方針には、自己の素質を尊重し、

学習者の主体的な学習を重視しつつ、自国の伝統文化の継承を目指す等の共通性が見られることがわかる。また、基礎学力を担保するために学習内容は削減しない点も同様である。

中国では２０００年以降、新たに制定された「課程標準」に依拠した教科書が複数の民間出版社から出版されている。その学習内容や指導方法には、日本の古典教育にも有意義なものが含まれている。本論文では、それらを分析することにより、大学における中国古典教育の導入法について提言を試みたい。

Ⅱ　学生の「漢文」に対する意識と学習状態

(1)「漢字・漢文に関するアンケート」調査結果の分析

本学の「漢文学」を効果的に行うために、次のようなアンケート調査を実施した。

調査目的：「漢字・漢文」に対する意識、及び高等学校までの学習状況の把握。

調査対象：武蔵野大学「漢文学」（日本文学文化学科１年必修）第３学期履修者

調査時期：２０１６年９月

調査人数（回答率）：101人（93・５％）

まず、出身校によって「漢文」の授業の実施状況にも差異があることを想定し、高等学校での漢文の履修状況を調査した。その結果は次のとおりである。（複数回答）

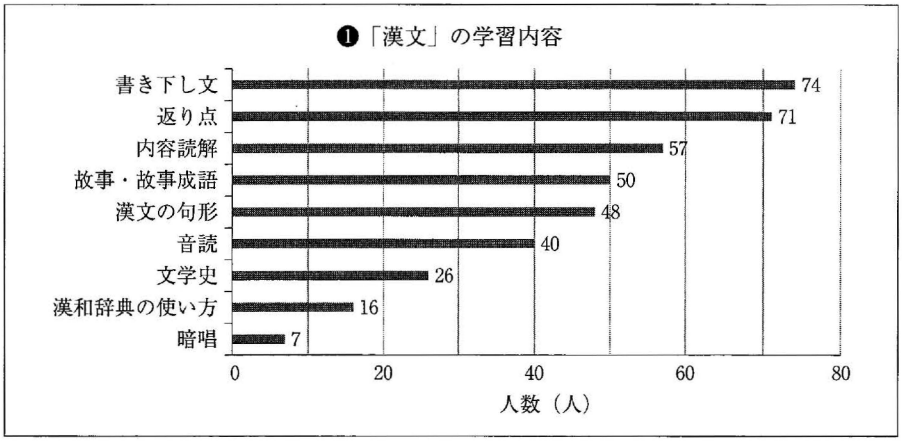
・1年次に学んだ…49％
・2年次に学んだ…68％
・3年次に学んだ…45％
・3年間学んだ…24％
・1年次のみ学んだ…15％
・2年次のみ学んだ…27％
・3年次のみ学んだ…8％。
・漢文の授業はなかった…5％

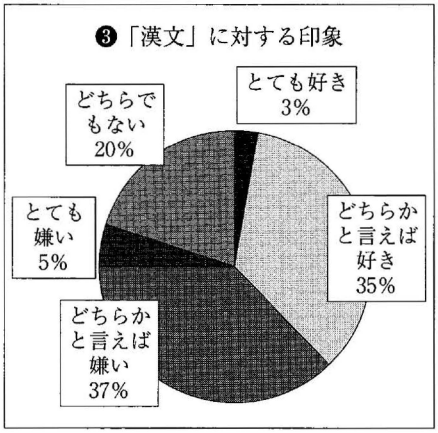
この調査では、約95％の学生が漢文の学習をしていた。これは、漢文分野を含む「国語総合」が高等学校で共通必履修科目となっているからであろう。3年間学んだ学生も24％いる。約半数の学生は、2、3年次も「古典B」等を選択履修して漢文を学習しているようだ。2年次に漢文を学習するケースが最も多いのは、1年次で古文文法を学んだ後、漢文の学習に入るというカリキュラムが組まれているからだと考えられる。

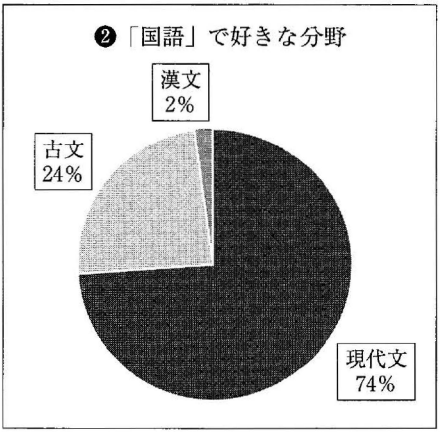
高等学校における主な学習内容は《図表❶》のとおりである。「返り点」を学び、「書き下し文」にして現代語訳するという指導法が上位を占めている。

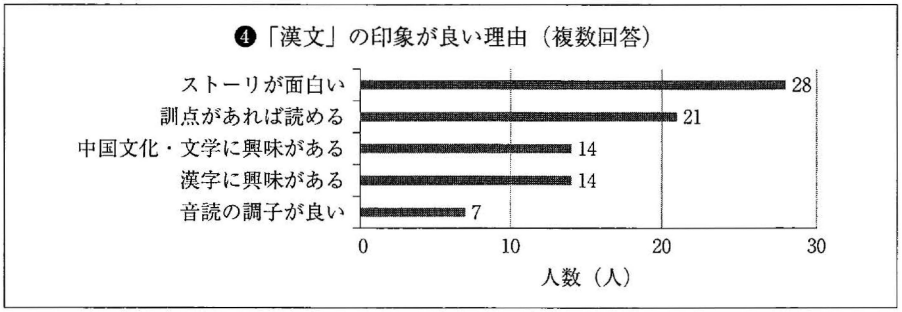
次に、《図表❷》で、「国語」の中で最も好きな分野について聞いた結果を示す。「漢文が好き」な学生は2％しかおらず漢文嫌いの傾向が認められる。しかし、これは現代文や古文と比較した結果であって、漢文もできれば好きになりたいとコメントした学生も少なからずいた。

このことは、「漢文」に対する印象を尋ねた《図表❸》で、「とても好き」と「どちらかと言えば好き」の合計が約4割と


❶「漢文」の学習内容
書き下し文
返り点
内容読解
故事・故事成語
漢文の句形
音読
文学史
漢和辞典の使い方
暗唱
74
71
57
50
48
40
26
16
7
0
20
40
60
80
人数（人）


❸「漢文」に対する印象
とても好き
3%
どちらかと言えば好き
35%
どちらかと言えば嫌い
37%
とても嫌い
5%
どちらでもない
20%

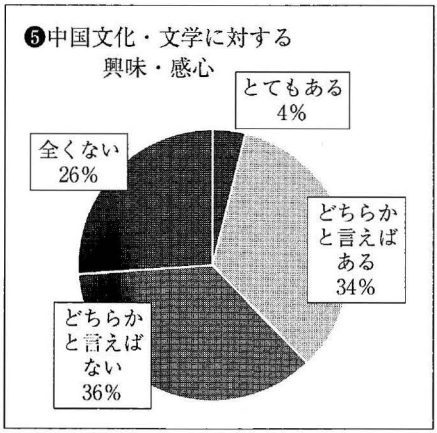

❷「国語」で好きな分野
漢文
2%
古文
24%
現代文
74%


❹「漢文」の印象が良い理由（複数回答）
ストーリが面白い
訓点があれば読める
中国文化・文学に興味がある
漢字に興味がある
音読の調子が良い
28
21
14
14
7
0
10
20
30
人数（人）

いうことからも見て取れる。

漢文が好きな理由については、《図表❹》を見てわかるように、そのストーリの面白さを挙げる学生が最も多かった。注目すべきは、「訓点があれば読めるから」がその次に多かったことである。自由コメント欄にも、10人程度の学生が、漢文は難しいが、だからこそ訓点や辞書を駆使して自力で読めた時の喜びを書いていた。それゆえに、大学の講義では白文が読めるような指導を期待するというコメントも多かった。

また、《図表❺》「中国文化・文学に対する興味・関心」の調査結果でも、「とてもある」「どちらかと言えばある」と答えた学生が約4割（40人）いた。



具体的にどのようなことに興味・関心があるかは概ね次のような結果であった。（複数回答可で選択）

○日中両国文化・文学・考え方の異同…30人
○故事成語などの意味…25人
○中国文化・文学が日本に与えた影響…23人
○歴史的背景や歴史上の人物…22人
○中国の食文化…20人
○漢詩や詩人…19人
○諸子百家などの思想…16人
○その他…伝統的な音楽（2人）、伝説・民話など（2人）、服飾文化（2人）

しかし、この結果は同時に、日本文化・文学を専攻する学生の約6割（60人）が漢文を敬遠していて、中国文化・文学にも興味・関心がないことを示している。

では、なぜ漢文が嫌いなのか、その主な理由は次のようであった。（複数回答可で選択）

○漢文法（漢文の句形）がわからない…42人
○訓読の仕方がわからない…28人
○書き下し文が難しい…26人
○作品の内容が難しい…18人
○漢字が苦手…18人
○漢文に興味がない…27人
○その他…授業で内容がわかっても結局一人で読めるようになっていない（5人）
英語と違って句形を覚えても自力で読めない（4人）
漢字を見ただけで頭が痛くなる（4人）
長すぎると眠くなる（3人）
歴史的背景が複雑（3人）

思想は訳しても意味がわからない（2人）

漢文嫌いの傾向にある学生のほとんどが、漢文句形等の文法学習が嫌だと答えている。これは単に難しいということではなく、自由記述にあるように、訓点や漢文句形を覚えても白文が読めるわけではないということも要因となっている。この点は鋭い指摘だと言わざるを得ない。また、漢文の授業があったにも関わらず心に残っている教材作品が皆無に等しい点も看過できない。これは、「好き」「どちらかと言えば好き」と答えた学生も同様で、作品の歴史的背景や地理的関係の知識はほぼないに等しかった。結局、学習内容を断片的にしか覚えていないということだろう。

(2) 課題の所在とその改善の方法

大学では、これらの断片的な知識を繋げて、より確かな知識として定着させる過程が必要となる。1年次の「漢文学」で、中国古典を学ぶための基礎学力を身に付けることが重要なのは言うまでもないが、課題は、2年次以降の中国古典の指導法にもある。筆者は今年度（２０１６年度）第4学期から3年生を対象とした和漢比較文学の講義（「漢文学中国文学研究Ⅰ」）を担当するのだが、本章(1)のアンケート調査の分析結果を踏まえると、最初から学生に馴染みのない両国の古典を比較教材にするのはややハードルが高いのではないかと考えた。これは現在の文学部系の学生全般に言えることであろう。

これらを踏まえると、日中両国共通の古典教材は、比較文学研究の導入に適していると考えられる。前述のように、近年の教育改革においては日中間で共通点が多く、古典学習の内容や指導法も示唆に富んでいる。何よりも既習の教材作品は漢文を苦手とする者に親しみと安心感をもたらし、新たな学問領域に進む際の一助となるだろう。自身が学んできた漢文教材が、中国ではどのように扱われているのかは、興味・関心を喚起することが期待される。以下で、古典教材の中でも特に漢詩教材を扱った指導法について検討していくことにする。

Ⅲ　日中共通の漢詩教材を使用した指導について

(1) なぜ漢詩教材に着目するのか

漢詩のような韻文は、朗読・暗誦することによって身体に刻み込まれ、血肉化していく。それゆえに、一度学習した内容を変更することは容易ではない。日本において漢詩は、古来、訓読という独特の方法で、原詩に触れながら同時に日本語の文語文に翻訳することにより、あたかも自国の文学のように愛誦してきた。訓読した文語文は、漢文訓読体としてそのリズムを身体で感じながら、詩情を心に刻んできたのである。この〝身体化・内在化〟とも言える漢詩の受容とその学習法について松浦友久（２００２）は、「訓読漢詩は最初に覚えた読みを替えるのに違和感が大きい」[4]と述べている。

現行の学習指導要領（平成20～21年告示）[5]では、小学校高学年から「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章

について、内容の大体を知り、音読すること。」（「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」ア伝統的な言語文化に関する事項）とし、中学校でも「古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること」として、音読も重視することを明示している。そのため、特に小学校では音読してリズムを感じることが主たる学習活動となっている。

中国でも伝統的に古典詩の暗記・暗誦に力を入れている。「課程標準（2011年度版）」では、9年間の義務教育期間中に背誦（暗誦）を推奨する古典詩として、135篇をリスト化して掲げている。

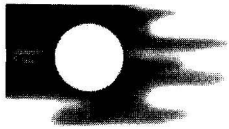
つまり、日中両国において初等教育の段階から、程度の違いはあるが、漢詩を朗読・暗誦していることになる。その際、日本では原詩を訓読で読み、漢文訓読調の日本語文を暗誦しているのであるから、同じ作品を学習しても両者間に解釈や詩趣の感じ方に異同が認められる可能性がある。その違いの検証を和漢比較文学研究の導入に取り入れるのである。既習の漢詩が学習者の身体に内在化していれば、比較の対象が自分自身ということになり学習効果も大きいと考える。

(2) 本文に異同のある漢詩作品

日中両国で親しまれている漢詩でも、教科書記載の本文に異同がある。その一例として、中国の小学1年級（日本の小学校1年生に当たる）の「語文」の教科書に採録されている「静夜思」（李白）を示す。[6]

これは、現在、最も採択されている人民教育出版社の教科書本文だが、その他の主な出版社である江蘇教育出版社、北京師範大学出版社の教科書も同様の本文を載せている。一方、日本で一般に通行しているものは次のようになっている。

牀前看月光　疑是地上霜
挙頭望山月　低頭思故郷
（※傍線部が異なる箇所である）



6 静夜思

jìng yè sī

李白

chuáng qián míng yuè guāng，
床前明月光，
yí shì dì shàng shuāng。
疑是地上霜。
jǔ tóu wàng míng yuè，
举头望明月，
dī tóu sī gù xiāng。
低头思故乡。

举乡
光故
床低
夜望
静头

現在では、日本のものが李白のオリジナルであり、中国の語

文教科書のものは、清朝以降に見える素性不明の作であることは確定していると言ってよい。[7] しかし、教師用指導書で参照されている『唐詩鑑賞辞典』(上海辞書出版社　1983年)も、「明月光」・「明月」としており、日中間で全く異なる状況となっている。

筆者は、2013年度に本学の「漢文学研究I」(2年次選択科目)を担当したが、その時に履修していた中国人留学生が「静夜思」の異同に気付き、大変驚いていた。小学生の頃から親しんでいるので「山月」とするのに抵抗はあるが、今まで正しいと思い込んでいたことが、実はそうではないことがわかってよかったと言っていた。このような気付き積み重ねが大切だと考える。

Ⅳ　日中共通の定番教材の比較と指導実践への活用

(1)　日中共通の漢詩教材

現在、中国で最もシェアの高い人民教育出版社「語文」の義務教育課程から高中(日本の高等学校に当たる)課程までの教科書には138篇の古典詩が採録されている。そのうち日本と共通しているものは31篇である。この中から日本の教科書の採録頻度が高く、かつ一般にも知られているものを選び、それらがどの程度本学の学生に定着しているかアンケート調査を行った。

《日中共通漢詩教材に関するアンケート》

2016年11月実施

調査対象：漢文学履修者　　回答者数(率)：101人(98%)

※教材作品には、採録されている校種・科目と採録している発行者数を記した。

(例　小5①：小学校5年生の教科書1社で採録していることを示す。)

※漢詩は、「語文」教科書で学習する順に配列した。(最初の二重傍線(「竹里館」まで)が小学課程、次の傍線部(「月下独酌」まで)が中学課程、それ以降は高中[8]課程)

※調査対象者には、各漢詩に対して最も当てはまる項目に○印を付けてもらった。

《日中共通漢詩教材定着度一覧表》

漢詩(括弧内は冒頭部)	暗唱した	よく覚えている	だいたい覚えている	あまり覚えていない	全く覚えていない	やっていない
静夜思(牀前 月光を看る)小5①小6①中1①中3①国総⑧古B①	0(人)	3	6	16	18	59
春暁(春眠暁を覚えず)小5①小6③中2③中3②国総⑦古A①古B②	25	23	24	14	6	9
絶句(江碧にして鳥逾(いよいよ)白く)国総③古B②	6	10	19	17	16	33

右図中に太字で示したように、「春暁」と「春望」の定着度

送元二使安西（渭城の朝雨軽塵を浥す）中3①国総⑧	2	8	0	**16**	0	1	1	2	1
黄鶴楼送孟浩然之広陵（故人西の方…）中2③中3①国総③	6	17	3	**17**	3	5	5	1	4
竹里館（独り坐す幽篁の裏）古B③	14	27	5	**24**	3	2	10	7	10
春望（国破れて山河在り）中2③中3②国総⑧古A①	14	13	10	**16**	7	9	14	19	13
石壕吏（暮れに石壕の村に投ず）古B⑤	10	13	13	**15**	19	16	13	8	11
飲酒（廬を結びて人境に在り）古B⑥	33	23	71	**2**	69	68	58	64	62

が極めて高いことがわかる。暗唱した人数は「春暁」の方が多いが、この漢詩は日中共にごく入門期に扱われており、教科書の記述も比較すべき内容に乏しい。

そのため本論文では、次章以下「春望」を中心に論じていく。

V　教材としての「春望」

(1)　教科書における「春望」の日中比較

杜甫の「春望」は日本人に馴染みの深い漢詩の一つである。首聯「国破れて山河在り　城春にして草木深し」は人口に膾炙し、日本人がこのフレーズを用いる時、そこには「人と自然の関わり」についてある種の詩情を共有している。これは本家の中国においても同様であろう。しかし、前述のとおり、中国では原詩のままで読み、日本では訓読によって「漢文訓読体」に変換された詩を読んでいる。そのため、双方には何等かの異同が生じている可能性がある。本項では、日中両国の教科書及び教師用指導書から解釈や指導法の相違点を検証し、大学での指導法を考察していきたい。

「春望」の教科書における扱い方には日中両国でそれぞれ特徴がある。学習の系統性・関連性という観点から言えば、中国では杜甫の他の時期の作品と関連付けて詩風の変化を学ぶ単元が設定されることが多い。一方、日本では古文分野の「おくのほそ道」（平泉）の典拠として関連学習し、漢詩が日本文学に与えた影響の一端を学ぶようになっている。

(1)－1．教材「春望」の学習のねらい

現行最新版の人民教育出版社8年級（日本の中学2年生に相当）の教科書で、「春望」は【杜甫詩3首】という単元で、「望岳」「石豪吏」と関連付けて扱われている。1～7年級までの教科書では漢詩はそれぞれ単独で教えられており、この単元で初めて関連学習が行われることになる。

単元の冒頭には、学生に向けて次のような「単元のねらい」が示されている。

杜甫は唐代の大詩人です。彼の詩は唐王朝の盛衰を反映しており、それゆえ「詩史」と称されています。この三首の詩は異なる時代に作られました。

「望岳」は「開元の治」の全盛期、杜甫二十四、五歳の時の作です。「春望」と「石豪吏」は「安史の乱」の前期の作で、杜甫はすでに中年に達していました。ここでは、詩の作風の変化に注意して読んでいきましょう。

この「ねらい」は日本の古典教育への示唆に富む。日本でも杜甫の詩は複数の校種で重複して扱われているが、教科書に「詩史」という記述はほとんど見られない。ほとんどの場合、李白の「詩仙」に対して「詩聖」と紹介するにとどまり、なぜ「詩聖」なのかについても深く言及しない。自国の古典である中国との違いはあって当然なのだが、杜甫の活躍年代についても、日本では脚注等で生没年（712～770）を記し、「盛唐の詩人」とするにとどめることが多い。このことが時代の把握が曖昧で、作品自体もよく覚えていない結果を生み出す一因とも考えられる。そこで大学においては、まず、杜甫の生年は玄宗（在位712～756）が即位した年に当たり、以後45年にわたる治世が杜甫45歳までの前半期の詩作時期に相当することを押さえたい。この年代は、唐の都長安が政治文化の中心として絶頂を誇った時期とも重なる。

さらに「単元のねらい」では、「望岳」「春望」「石豪吏」を通して作風の変化を読み取らせようとしている。これは中学段階の学習活動としてはかなり高度で、指示内容も抽象的かと思われるが、杜甫の作風の変化は中国の他の詩人と比べて明確だとされている。これに関して吉川幸次郎（1954）[9]は、他の中国の詩人たちを引き合いに出し、「ある一つの型に到達すると、その型によって一生詩を作るというのが、むしろ定石」であるのに対して、「杜甫の場合は特殊であって、その詩は年とともに顕著な成長をとげている。その精神の成長のありさまが、単に詩に歌われた事柄ばかりでなく、詩の味わいの上にも現れている」と述べている。このような杜甫詩の「成長過程」の検証は、日本においても、大学の「漢文学」や高等学校の「古典B」等で可能であろう。

(1)－2．教材本文及び語注

ここでは学習内容について詳細に比較分析するために、「語文」教科書本文とその語注、及び日本の中学校教科書の一般的な語注を示す。

春　望①

国破山河在，城②春草木深。
感时花濺泪，恨别鳥惊心。
烽火连三月，家书抵万金。
白头搔更短，浑欲不胜簪③。

【語注】：①唐の粛宗至徳元年（756年）八月、杜甫は鄜州（現在の陝西富県）から、霊武（現在の寧夏に属する）で即位した粛宗の元に駆け付けたが、途中で反乱軍に捕まり、その後長安に軟禁された。この詩は翌年三月の作である。②〔城〕長安城を指す。当時、反乱軍に占領されていた。③〔浑欲不胜簪（zan）〕全く、簪さへ挿せなくなってしまった。浑は、実際のところ、完全に。簪は、一種の髪を束ねる髪飾り[10]。

【日本の一般的な中学校国語の語注】：

1春望…春の眺め。
2国破れて…国の都が破壊されて。長安は反乱軍に攻め破られて。
3城…城壁で囲まれた都市。「国」「城」はともに当時の都長安（現在の陝西省西）。
4時に感じては…戦乱が続く時世のありさまに悲しみを感じては。
5花にも涙を濺ぎ…花を見ても涙を流し
6烽火…敵の来襲を知らせるのろし。ここでは戦乱を意味している。
7三月に連なり…三か月間続いて。
8家書…家族からの手紙
9白頭搔けば更に短く…頭の白髪はかくたびに抜け落ちて薄くなり。
10渾べて簪に勝へざらんと欲す…全く簪をさすこともできないほどだ。「簪」はここでは冠を固定するピンのこと。

既に「静夜思」で見たように、中国では古典詩も簡体字を用い横書きで表記される。さらに、現代中国語と同様の標点（日本の句読点に相当する）が附されている。これらは日本との顕著な違いである。

語注に目を移すと、「語文」の教科書では、①で詩の詠まれた歴史的背景や経緯を解説しているが、日本の教科書では触れていない。現在、日本では全ての中学校の教科書に「春望」が採られているが、歴史的経緯の記述はほとんどない。これは、中学校段階では、漢詩の形式理解、朗読・暗誦、及び詩情や作者の心情の大まかな理解に主眼が置かれているためであろう。それにしても、多少の歴史的経緯の説明がなければ却って心情理解が難しいのではないかと懸念される。「国語総合」の教科書でも、「当時、長安は安禄山の反乱軍の手に落ち、杜甫は軟禁状態であった」程度の説明が付いているだけである。日本の教科書の場合、教師が授業内で補足することを想定していると

も言える。そのためか、日本の教師用指導書は、中高ともに、中国の指導書よりも詳細な解説がなされている。しかし、解説の専門性が高く情報量も多いゆえに、教師はどの程度生徒に教えればよいのか迷う場合もある。その際、「語文」教科書の解説が一つの目安になると考える。

ただ、「語文」教科書の語注③〔浑欲不胜簪〕の〔簪〕の説明として、「簪は、一種の髪を束ねる髪飾り」とあるのは学習者の誤解きかねない。これに関しては、「中学校国語」の語注10の方がより正確である。本学の「漢字・漢文に関するアンケート」では、自由記述欄に「中国の伝統的な服飾文化や民族衣装に興味がある」という回答が見られた。「簪」や「冠」がどのような物を指すのか、学生自身が調べてみるのもよいだろう。

(1)－3.「春望」の首聯の解釈と指導

さらに語注の比較分析をしていくと、首聯に関する解説に違いが認められる。

「語文」：②〔城〕長安城を指す。当時、反乱軍に占領されていた。

「中学校国語」：2国破れて…国の都が破壊されて。長安は反乱軍に攻め破られて。

この二つを見比べると、当時の国都長安の情況について、中国の語注では反乱軍に占領されていたと説明しているのに対して、日本の語注では、反乱軍に攻め破られて破壊されたとしている。学習者は、中国の語注から長安は陥落したと解釈し、日本の語注からは長安は壊滅状態にあったと解釈すると推測される。

では、当該箇所を両国の教師用指導書ではどのように説明しているか見ていきたい。中国の教師用指導書では、【関係資料・作品賞析】で『唐詩鑑賞辞典』（上海辞書出版社・1983年）を引用し、司馬光（1010－1086）の『温公続詩話』の詩評を載せている。

古人為詩、貴于意在言外、使人思而得之。…（中略）…近世詩人惟杜子美最得詩人之体。…（中略）…山河在、明無余物矣。草木深、明無人矣。[11]

〈現代語訳〉：古の人が詩をつくる時、意は言外に置いて読む人に想像させることを貴んだ。（中略）近世の人でこれを体得しているのは、杜甫をおいて他にいない。（中略）「山河在り」とは、山河以外に物がないこと明らかにし、「草木深し」とは、人がいないことを言っているのである。

このような「人」と「自然」の対比に基づいて、「人」である杜甫の視点から「自然」と捉えたとき、人間界のことなどまるで意に介さない「自然」の存在はどう映るのか。川合康造（2012）は、「「人」の立場にいる杜甫にとって、頼もしさを覚えるどころか、人であることの悲しさを思い知らされる」[12]としている。さらに、川合は、《春望》における杜甫の自然に

対する想いを《望岳》の詩情と比較して、「「望岳」では、泰山のたたずまいに全面の信頼を寄せ、それに向き合う自己との間になんらの懸隔を挟まなかったのと何たる違いか」[13]と述べている。以上のような対比を踏まえて、首聯の解釈を簡潔に示すと次のようになるだろう。

「山河在」⬇自然は悠久不変である。ゆえに、頼もしい存在というよりは、人間の存　在なぞ全くかかわらない無情・非情な存在。

「草木深」⬇戦乱を避け人民は都から逃亡。そのため人影のない長安城市は、草木だけが生い茂っている。

上記の『温公続詩話』は、日本のほぼ全ての教師用指導書でも言及されているが、「無余物矣」「明無人」は「言外の意」と捉えているためか通釈には訳出していない。ここで、両国の日中の教師用指導書の首聯の通釈を比較し、異同をより明確に把握していきたい。

「国破山河在　城春草木深」の通釈

○中国　「語文」の教師用指導書

国都在淪陥后已経変得残破不堪，然而山河依旧是原来那个様子：春天降臨到長安城，然而眼前却是乱草叢生。

国都は陥落後、すでに堪え難いほど損なわれてしまったが、山河は依然として元のままで、春は長安城市に巡ってくるが、眼前は却って草が茫々と生い茂っている。

○日本　「国語総合」の教師用指導書

国都は破壊されてしまったが、自然は依然としてそこに在り、春が巡ってくれば長安城市はまた草木が青々と茂ってくる。

○日本　「中学校国語」の教師用指導書

国（の都）は破壊されても山や河は（元のまま）存在しており、（長安の）町は春になって草や木が生い茂っている。

日本の教師用指導書がしばしば参照している、『校注　唐詩解釈辞典』（松浦友久編・大修館書店・１９８７年）の通釈には、「国は崩壊し、山河のみが以前と変わらずに存在している。ここ長安も春になれば、草や木が昨春までと同じように青々と生い茂げる。」とある。この通釈も日本の指導書と同様に、「無人」を詩句の直接的表現というよりも、「言外の意」と捉え、表面には明示していない。

(2)　日中両国が想起する情景

―「国破れて山河在り」を巡って―

「国破」の「破」の解釈には、大きく分けて「壊滅」説と「陥落」説があることがわかった。日本人一般も、「国破れて山河在り」により、「戦後の焼け野原」や、近年では「３・１１」の東日本大震災の風景などを想起することが多いようだ。この日本人の共通認識について堀誠（２０１４）は、「戦乱による破壊と自然のたくましさのコントラスト、そして日本における詩的な

共感とその文学的な需要が基底に働くものと推測される。」[14]と述べている。堀は、さらに、「2011年に発生した東日本大震災の経験を通しても、杜甫の「春望」という詩篇が演じた役割は大きく、一つの中国詩歌のイメージを日本の風土に架橋するものとして、その教材を活かすことは必須である」[15]として、漢詩の受容を古典の世界にとどめるだけでなく、現代生活の中にも古典受容の事例を求めることの重要性を説いている。

ところで、実際の長安の情況はどうであったのか。司馬光の『資治通鑑』（唐紀・第218巻・至徳元年）は次のように記している。

壬辰、召宰相謀之。〈中略〉甲午、百官朝者什無一二。上御勤政楼、下制、云欲親征、聞者皆莫之信。

【現代語訳】：（楊国忠から蜀への行幸を進言され）壬辰、天子は宰相らを召して入蜀の件を謀らせた。〈中略〉甲午、百官のうち出廷したものは十人に一、二人もいなかった。天子は勤政楼にお出ましになり、制を下して「親征しようと思う」と言われたが、誰も信じなかった。

上記に続く部分で、玄宗は皇太子（後の粛宗）、楊貴妃、楊国忠、その他のごく一部の近親者と共に、密かに長安から脱出したと伝えている。佐藤正光（2014）は、これらの記述から、「ほぼ無血開城の状態で反乱軍が入城し占拠した。長安は「壊滅」したわけではなく「陥落」したのである。」[16]としている。史実としては、壊滅状態にあったわけではないらしい。中国で「陥落」説が有力なのはこのためだと推察される。中国の指導書の首聯の通釈が、「国都は陥落後、すでに堪え難いほど損なわれてしまった」としているのは、長安は壊滅状態にあったわけではないが、異民族の侵入を許し、国都としての威光を失っていた現実を反映しているのであろう。

Ⅵ 「春望」から見える古典教育の課題とその改善策

(1) 重複教材の課題

日本の教科書では異校種間で古典教材の重複が見られる。本論文「Ⅳ」で提示した《日中共通漢詩教材定着度一覧表》を見てもこのことは明らかである。「春望」も中学校で全社、「国語総合」で8社、「古典A」で1社に採録されている。また、日本の学校現場では、「春望」は「おくのほそ道」（平泉）と関連付けて学習することも前述のとおりである。この「平泉」の章段も、中学校で全社、「国語総合」で8社の教科書に採録されているが、「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」の語注に、杜甫の「春望」の首聯を典拠として示して、「「国破山河在……」による。」と紹介しているだけある。教科書自体から、中学校と高校の学習内容の差がはっきりと見て取れるわけではない。授業内での教師の指導を前提にしているにしても、学習の深化が学習者に伝わるように改善する必要はあるだろう。

(2) 大学の古典教育における「春望」と「おくのほそ道」（平泉）

大学の古典学習においては、比較文学研究の観点から、芭蕉

が「春望」の首聯をどのように捉え、それを「平泉」の章段にどのように反映させていたかの検証を試みたい。

言うまでもなく、芭蕉にとって杜甫は「古典」である。芭蕉自身は、『杜律五言集解』（明）邵傅集：（明）陳学楽校）の注釈書を読んでいたと考えられている。[17] この注釈書は司馬光の『温公続詩話』を載せている。したがって、芭蕉は「春望」の首聯から、「自然」にとって「人」とは取るに足らない存在であり、無情な「自然」を眼前にして、杜甫は「人」である悲しさを思い知らされるという関係性を聯想していると考えられる。

これを踏まえて「平泉」の章段を読んだ場合、高等学校までの授業とは異なる情景の想定が可能かどうか検証してみたい。

「平泉」章段　本文

三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。（中略）さても義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の叢となる。国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠打敷て、時のうつるまで泪を落としはべりぬ。（傍線は林による）

異なる情景とは具体的にどのようなものか。その一つの可能性として塚越義幸（２０００）は、『杜律集解』の解釈を踏まえつつ、次のような「平泉」の解釈をしている。

藤原三代の当時繁栄を誇っていた平泉が、荒武者たちの無意味な戦乱により無惨に荒廃し、都市の機能を失い、それを強調するかのように叢だけが無情に広がる自然の姿が眼前によみがえる。おのずから「国破れて山河在り」の詩情が彷彿としてくる。そして、五百年前の凄惨を極めた平泉の山河の世界から現実に戻ると、梅雨空にくすんで生い茂るくさむらだけが目に入ってくる。自然とはなんと過酷な存在かと実感せざるを得ない。[18]

「城春にして草青みたり」の情景を、「梅雨空にくすんで生い茂るくさむら」としているのが異なる情景と言えよう。高等学校までの教科書は、「春望」の首聯に詠まれ情景を、主として「長安は破壊されても、昨春までと同じように青々と生い茂げる草木」としていた。したがって、これを典拠とする「平泉」の章段で、芭蕉の眼前に広がる情景も「青々と生い茂るくさむら」とするのが主流である。

しかし、中国の「語文」の教科書が参照している司馬光の「人」と「自然」の対比を踏まえると、「平泉」章段も異なる視点で捉えることができる。これは日本と中国の比較であると同時に、現代の日本人と元禄の日本人との比較でもある。

(3)　和漢比較文学入門期の指導の実際

大学において「和漢比較文学研究」のような講義の導入に「春望」を扱う際、学生には次のような考察のポイントを示しておきたい。

〈考察のポイント〉

・高校までに、「春望」（特に首聯の解釈）をどのように教わってきたか。

・中国の指導書にあるような解釈をどう考えるか。

・日本人が首聯から想起するイメージはどのようなものと考えられるか。

・首聯の情景を色で表現すると何色か。

筆者は、今年度、本学の第4学期に「漢文学中国文学研究Ⅰ（和漢比較文学）」（3年次選択）を担当する。学生とのやり取りの中で、実際にはどのような展開を見せるのか機会があれば実践報告と課題の検証をしたい。

２０１３年度にも、本学「漢文学研究Ⅰ」（2年次選択）の導入部で、「春望」の首聯の解釈を扱ったことがある。その際、中国人留学生から「日本人は戦争で破壊された都をイメージするようだが、長安が戦場になったわけではない」や、「中国の建物は日本のように燃えやすくないので、焼け野原にはならない。」というような意見が出た。日本人の学生からも、「日本史で「応仁の乱」を学習したので、長安も京都のように長い間戦場になったのかと思っていた。」や「現代文で芥川の「羅生門」をやったから、その荒廃したイメージと重なっていた」等の発言があり、予想以上の盛り上がりをみせた。やはり、馴染みのある作品からは、学習者自身の文化的背景や経験に基づく発想が得やすく、比較文学の教材に適していると考える。

今年度の講義では、さらに踏み込み、自分たちがなぜそのようなイメージを抱いたのか考察させたい。上記のような経験的要因の他に、詩中の「烽火連三月」等の語句の解釈を検証してみることにより、より作品に基づいた議論を試みたいとも考えている。この講義には、中国と台湾からの留学生も若干名参加しているので、彼らの意見も積極的に反映させていきたい。

おわりに

近年、日本の若者は内向き志向だと言われているが、これは何も日本の若者に限ったことではなく、世界的な潮流ではないだろうか。自国の文化や異文化に対する無知と無関心が、これに拍車をかけるのではないかと懸念している。自国と他国の文化を尊重するには、まず、それについて知らなければならない。

本学の学生とは、「漢文学」や「和漢比較文学」がその第一歩であるいう共通認識を持って講義を進めていきたい。比較するのは、優劣をつけるためではない。深く学び、その成果を将来に生かすためだということを実感できる講義を構築していきたいと考えている。

〈注〉

1 『高等学校学習指導要領解説　国語編』（文部科学省　平成22年）38頁の「第1「国語総合」4内容の取扱い(5)イ古典の教材」を参照のこと。

2 書き下し文を元の漢文（原文）に復元することを「復文」と呼

んでいる。江戸時代から漢文読解と漢作文ための訓練法とされてきた。近年、その効果が見直され大学や一部の高等学校等で実践されている。

3　中国の教育改革については、新中国中小学教材建設史（1949−2000）研究叢書『小学語文巻』『同中学語文巻』（課程教材研究所編著　人民教育出版社　2010年）の「総説」、国立教育政策研究所報告Ⅱ「教科書制度と教育事情　10.中国」（出典は『諸外国の教育動向2007年度版』（藤井和男　明石書店　2008）、同研究所報告書4.「諸外国における教育課程の基準―近年の動向を踏まえて―」（平成24年度プロジェクト研究調査研究報告書　研究代表　勝野頼彦　2013年）、教育調査第142集「中国国家中長期教育改革・発展計画綱要（2010〜2020年）」（文部科学省生涯学習政策局調査企画課　2011年）等を参考にした。

4　『漢詩―美の在りか―』（松浦友久著　岩波文庫　2002年）の238頁。

5　『小学校学習指導要領解説　国語篇』（文部科学省　2008年）、『小学校学習指導要領解説　国語篇』（文部科学省　2010年）

6　「語文一年級上冊」（課程教材研究所編著　人民教育出版社　2001年検定審議済2011年4月第20次印刷）の74頁。

7　「李白の「静夜思」をめぐって―中国での本文と解釈を視野に入れて―」（『早稲田教育評論　第26巻第1号』丁秋娜　2012年）、『校注唐詩解釈辞典』（松浦友久編著　大修館書店　1987年）の679頁等で論証されている。

8　日本の高等学校に相当する。

9　『杜甫ノート』（新潮社　1954年）の145〜146頁。

10　原文は、「簪、一種束髪的首飾」とある。（ただし、簡体字で表記されている。）

11　中華経典詩話『六一詩話　温公続詩話』（〔宋〕欧陽脩・司馬光撰著　中華書局　2014年）の137〜138頁。

12　『杜甫』（川合康三　岩波書店　2012年）の92頁。

13　同上。

14　「杜甫「春望」という教材」（『早稲田大学大学院教職研究科紀要第6号」2014年3月）

15　同上。

16　「唐詩深読み―名作を読み込めば―」（『新しい漢字漢文教育　第58号」全国漢文教育学会　2014年）

17　日本古典評釈・全注釈叢書『おくのほそ道評釈』（尾形仂著　角川書店　2001年）に依る。

18　「「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」の解釈をめぐって」（『野州国文学』65　平成12年3月）